

# 埋め込まれた「読者」

——民俗誌と記述に関するある本質について——

大 月 隆 寛

- 
- |                    |                |
|--------------------|----------------|
| 1 民俗誌と記述を論じることの不自由 | 4 「土地の人々」という神話 |
| 2 誰に向けての記述？        | 5 「読者」回復の必要    |
| 3 「書く」主体の分裂        |                |
- 

## 論文要旨

民俗誌を論じる作業は、近年若い世代を中心にすすめられている。しかし、奇妙なことに、民俗誌を論じれば論じるほど、記述の実践から遠ざかり、主体とことばとの間の剥離が進行する傾向が見られる。

それは、ひとり民俗学だけの問題でなく、人間と社会に関する学問全般に見られる現象であり、さらに言えば、ジャーナリズムの舞台においても見られるものである。この実践から常に遠ざけられるようなことばの存在の仕方は、〈現在〉に関わる過程を抱え込んだ表現の領域において、普遍的に観察できるものである。

この国の民俗学の歴史において、民俗誌が語られる際、ふたつの焦点が存在してきた。ひとつは、ある統一的全体としての「生活」や「社会」「人生」、もうひとつは「誌」である。つまり、「生活」や「社会」「人生」を散文で平易に記述することが、民俗誌には期待されてきた。

だが、民俗誌の議論においてそのような文体の問題は正面から論じられてこなかった。ということは、それらの記述の届く先に存在するはずの「読者」もまた、正面から意識されてこなかったことになる。言い換えれば、記述はその本来の使命である「伝達」と切り離されて、方法的自覚抜きに蓄積されてきたのである。

とは言え、「読者」は調査—記述の過程に埋め込まれてきた。それは、調査の段階においては、調査地に住む「現地の人々」であり、記述の段階に移行するにつれてなしくずしに「ふつうの人々」へと変貌してゆく。民俗学の幻視してきた「常民」イデオロギーの具体的存在のあり方は、このような埋め込まれた「読者」が方法抜きに自覚されないままに、調査から記述に至る過程におおいかぶさっていることに規定されている。この国の民俗学がこの先方法意識にもとづいた記述を回復するためには、これら「書く」ことからの疎外をまず自覚するべきである。